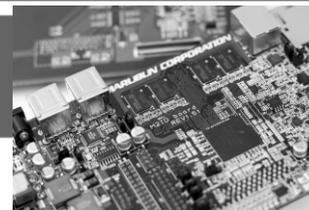


i.MX51 搭載ボード
M2ID に Android を移植する

北山 洋幸, 奥園 隆司

M2ID は、ネット・メディア時代のさまざまなモバイル・アプリケーションや、モバイル機器を開発するためのプラットフォームです。また、Freescale Semiconductor 社の i.MX51 プロセッサの開発キットでもあります。今回は Android の開発環境として試用しました。
(筆者)

丸文の「M2ID(エムツーアイディ, Marubun Mobile Internet Device)」を試用し、Android をビルドして、ボードを起動するまでの一連の作業を行ってみました。

本リファレンス・ボード(写真1)は、ディスプレイを搭載したモバイル機器の開発をメイン・ターゲットとしています。CPUに米国 Freescale Semiconductor(以下、Freescale)社製の i.MX51 マルチメディア・アプリケーション・プロセッサを搭載し、9インチ WVGA^{注1}液晶や各種インターフェースを装備しています(写真2)。

キットには、回路図とガーバ・データやLinux, Android ドライバのソース・コードが無償で添付されています^{注2}。

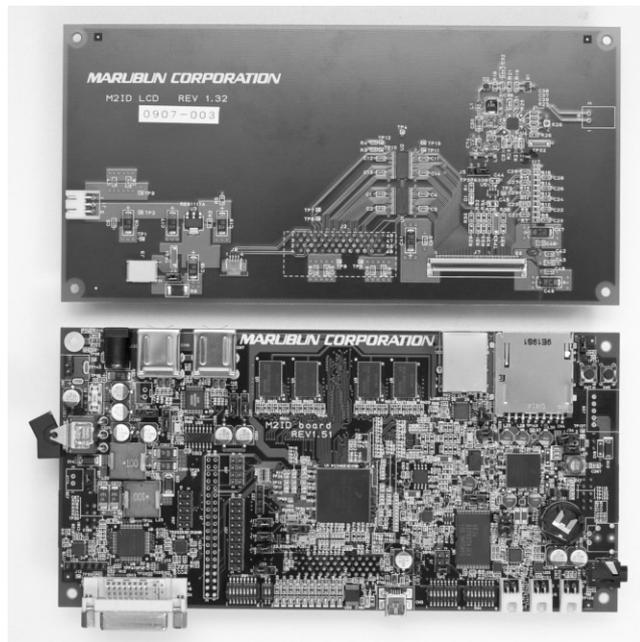


写真1 M2IDのボード外観

このため、購入後、すぐにシステムの開発に着手できます。OSはLinuxとAndroidが用意されています。Windows Embedded CEも用意されるようです。原稿執筆時点では未対応でしたが、すでに動作中とのことです。

1. リファレンス・ボードの特徴

本ボードの最大の特徴は、CPUにi.MX51を採用している点です。プロセッサ・コアに英国ARM社のCortex-A8/800MHzが使われており、現時点でこのコアを800MHzで動作させている製品はほかに見当たりません^{注3}。また、ハードウェア・コーデックを搭載しているため、HD-720P^{注4}を高速に処理できます。低消費電力のCPUなので

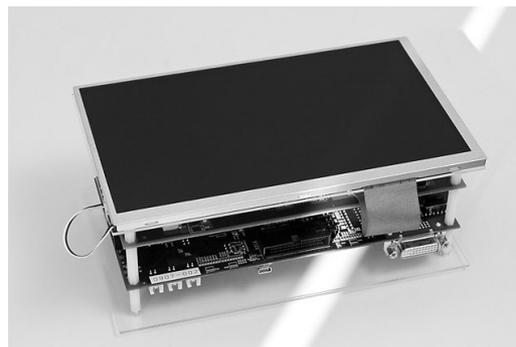


写真2 タッチ・パネル付きWVGA液晶パネルを用意している

注1: ワイドVGA, 800ピクセル×480ピクセル。

注2: ライセンスについては、各コードのライセンス規約に準じる。

注3: 2010年1月中旬の本稿執筆時において。

注4: 1,280ピクセル×720ピクセルのハイビジョン画質。